

女性高齢者の生活意識と生活設計に関する研究

第2報 女性のライフスタイルと生活設計

堀田 剛吉* 渡邊 廣二**
藤井 敏子*** 須田 博司

序 文

第1報で高齢化社会における女性の生活意識を、特に男性との比較において検討した。しかし現実の生活には生活準備意識を持っているだけでなく、長期計画をつくり、それにしたがって正しく生活する必要がある。この時代を豊かに生きるため長期的生活設計で分析すべき側面は、主に4つである。すなわち、健康面・生きがい面・経済面そして人間関係に結び付く介護面である。また短期生活設計は、経済問題以外に趣味・嗜好や技能問題など色々考えられよう。これらは家族の持つ価値観・ライフスタイルとライフステージによる差も出るので、考えるべき課題も多面となる。

本稿では、前報の生活意識調査の分析結果に加えて他の既存資料の活用により、高齢化社会を各人の価値観をもとに合理的に生きるため、ライフスタイル別生活設計の内容を考えた。とくに生涯という長期的視点を大切に、準備すべき問題とそのレベルをできるだけ具体的に検討してみたい。

1. 研究の目的と方法

本研究では、女性のライフスタイル・生活条件別生活設計を調査分析した上で、さらに既存資料を活用し各ライフスタイル別の具体的な生活設計内容を提案する事を目的とし、これを通して高齢化社会での女性自身が準備すべき課題とその対策を検討したい。

この目的を考察すべく下記のような具体的研究課題を設けた。

- ①女性のライフスタイル別生活設計の分析
- ②女性の生活条件別生活設計の分析
①②はアンケート調査による分析
- ③女性ライフスタイル別の具体的生活設計と課題
- ④女性の生活設計活用対策
③④は調査分析を踏まえ、他の既存資料の活用により検討、さらに具体的に検討していくため、課題に基づく仮説を下記のように設けた。
- ①女性のライフスタイルにより、生活設計に対する意識の違いがあるのではないか。
- ②女性の生活条件（都市・農村、職業形態、ライフステージ、居住関係）の違いにより生活設計に対する意識にも違いがあるのではないか。
- ③重視するライフスタイルにより生活設計の内容や重点のおき方（経済面、生きがい面、健康面、人間関係に結びつく介護面）に違いがあるのではないか。
- ④重視するライフスタイルにより具体的生活設計の立て方・内容が違ってくるのではないか。これらをもとに具体的生活設計課題を検討した。

2. 女性の生活設計意識とライフスタイル

将来の生活設計について考えるとき、「将来の生活設計を立てるときの期間」・「生活設計を考えるときに重視する内容」および「老後生活において重視する内容」などがある。第1報では、これらについて主として性別の分析を行い、生活意識と生活準備について考察したので、

*岐阜大学 **鳴門教育大学 ***名古屋女子大学（非）

ここではライフスタイル別の分析を行う。

(1) 生活設計の準備期間

まず、第1報でも見たように、先の計画を全く立てていないという女性は、全体平均では19.6%、また、10年程先まで計画を立てているという女性も同じく19.6%、2～3年程先まで計画を立てているという女性が多めで22.5%であった。

ライフスタイル別に見ると、やや差が見られる(第1表を参照)。まんべんスタイルの女性は全体の平均に近いが、食生活重視スタイルの女性および老後生活重視スタイルの女性では2～3年程先まで計画するという回答が多く、夫婦生活重視スタイルの女性では10年ほど先まで計画を立てているという回答が多い。また、回答数がやや少ないが、社会奉仕重視スタイルの女性では先の計画は全く立てていないという回答と1年程以内の計画を立てているという回答が多いのが特徴的である。

表：1 女性のライフスタイル別に見た生活設計の期間 単位：% ()実数

重視スタイル	1年程度以内	2～3年程先	5年程先のこと	10年程先のこと	全く立てていない	その他N・A	合計
食生活重視スタイル	10.4	28.4	17.9	14.9	20.2	8.2	100.0(134)
老後生活重視スタイル	13.6	29.6	16.9	14.4	13.6	11.9	100.0(118)
夫婦生活重視スタイル	16.9	18.1	16.9	24.1	15.6	8.4	100.0(83)
家の格式重視スタイル	9.7	13.9	16.7	20.8	18.1	20.8	100.0(72)
社会奉仕重視スタイル	20.4	14.8	14.8	9.2	27.8	13.0	100.0(52)
まんべんなくスタイル	11.6	21.4	16.8	21.4	22.5	6.4	100.0(346)
その他のスタイル合計	12.7	23.0	12.7	22.0	19.1	10.5	100.0(314)
女性全体合計	12.7	22.5	15.7	19.6	19.8	9.7	100.0(1121)

(2) 生活設計の内容

生活設計を立てる上で重視する内容は、男性と女性の間で差異が見られ、第1報で示したように、男性では生きがいや老後生活を重視したのに対して女性では経済を重視するものが相対的に多い。そこでここでは経済と生きがいの2項目について、ライフスタイル別に見ることにする(図1・2を参照)。

まず、経済を重視する傾向はまんべんスタイルの女性が最も強く、老後生活重視スタイルの女性がそれに続く。逆に、経済重視の傾向が相対的に弱いのは、社会奉仕重視スタイルの女性と家の格式重視スタイルの女性である。

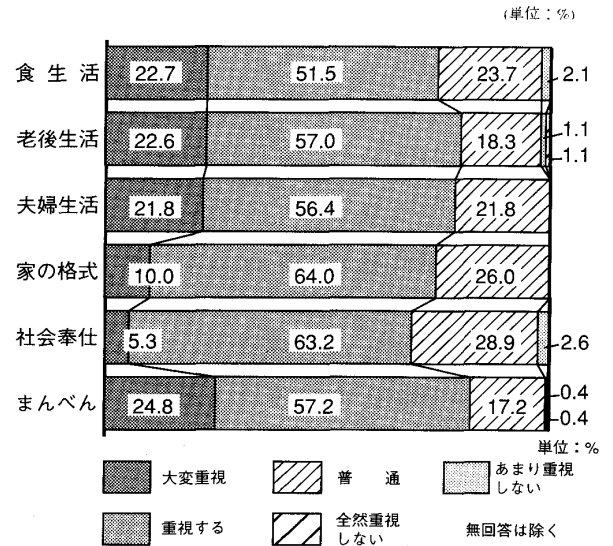


図1：女性のライフスタイルと生活設計の内容『経済』

次に、生きがいを重視する傾向は社会奉仕重視スタイルの女性が最も強く、老後生活重視スタイルの女性がそれに続く。逆に、生きがい重視の傾向が相対的に弱いのは、食生活重視スタイルの女性である。

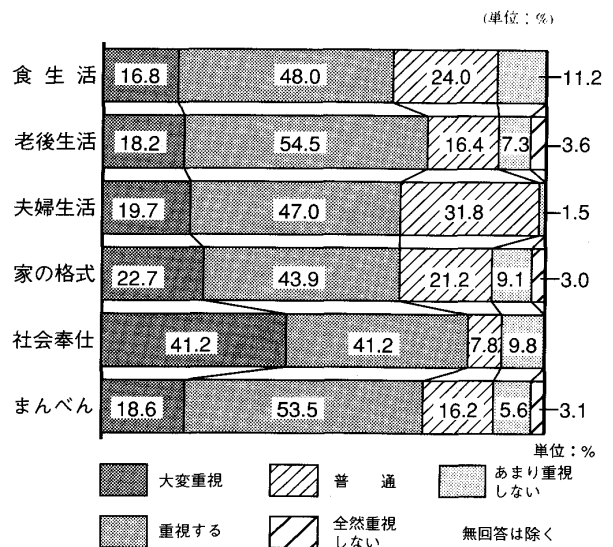


図1：女性のライフスタイルと生活設計の内容『生きがい』

(3) 老後生活における重視事項

生活設計の中でとくに老後生活において重要だと考える事項について、女性全体で見ると、健康を選択するものが最も多く40.7%である。ついで良好な夫婦関係22.5%、趣味・仕事20.7%の両者がほぼ同率で選択され、4番目に子供等との関係11.8%が続く。

ライフスタイル別に見ると(表2を参照)、まんべんスタイルと食生活重視スタイルはほぼ全体の平均に近い。老後生活重視のものは趣味・仕事を選択するものがやや少なく、子供等との関係を選択するものが多い。夫婦生活重視スタイルは良好な夫婦関係を選択するものが多く、趣味・仕事および子供等との関係を選択するものがやや少ない。家の格式重視スタイルのものは、子供等との関係を選択するものが多く、良好な夫婦関係を選択するものが少ない。社会奉仕重視スタイルのものは健康を選択するものがやや多い。

表：2 女性のライフスタイルと老後生活における重視事項 単位：% ()実数

重視事項 ライフスタイル	趣味・仕事をもつ	良好な夫婦関係	子供との関係を良	健康であること	友人・仲間がいる	経済的に安定	その他N・A	合計
食生活重視スタイル	20.9	23.9	9.7	39.6	3.7	1.5	0.7	100.0(134)
老後生活重視スタイル	16.1	21.2	17.0	40.7	0.8	0.8	3.4	100.0(118)
夫婦生活重視スタイル	12.0	38.6	7.2	38.6	2.4	1.2	0.0	100.0(83)
家の格式重視スタイル	18.0	13.9	22.2	40.3	1.4	0.0	4.2	100.0(72)
社会奉仕重視スタイル	18.5	18.5	13.0	48.1	0.0	0.0	1.9	100.0(54)
まんべんなくスタイル	24.9	20.8	11.3	38.7	1.4	1.2	1.7	100.0(346)
その他のスタイル合計	21.0	22.6	10.2	42.7	2.2	1.0	0.3	100.0(314)
女性全体合計	20.7	22.5	11.8	40.7	1.9	1.0	1.4	100.0(1121)

3. 女性の生活条件と生活設計

女性の大学進学率は平成元年に男性を上回るようになり、加えて働く女性も著しく増加した。このためか晩婚化・少子化も進み、家事の機械化・外部化が進んでいる。また長寿社会の到来は、高齢女性の独身後期も増加させた。このよ

うな急速な変化に個人的にも社会的にも順調に対応できず、女性の長寿を素直に喜べない情況を生んでいる。女性自身がまず長期生活設計をもつことが必要であるし、行政の施策や地域・家庭の対応が期待される。今モノの豊かな社会で多様なライフスタイルをもち、各人が自身の選択したメニューで生活していくことは好ましいことである。

ここでは第1報の女性高齢者の生活意識と生活準備を基盤とし、生活条件としての有業・無業別の生活設計を検討した。表3をご覧ください。

表：3 男女別職業 単位：% ()実数

	外勤型		家庭型			その他	N・A	計	
	常勤	パート	自営業	自由業	内職				無職
男	42.9	1.3	34.0	2.5	0.5	15.4	2.5	0.9	100.0(765)
女	14.6	14.9	16.5	3.1	9.5	38.0	2.1	1.3	100.0(1121)

外勤型(常勤外勤とパート外勤)では、女29.5%、男性44.2%であるのに対し、家庭型(自営と自由と内職、無職)は、女性67.1%、男性は52.4%である。なお調査者に高齢者の比率が多いこともあるが、全体としては家庭型が一般に多かった。

では長寿であり経済的に弱い立場の女性は、男性に比べ生活設計を早くからつくっているであろうか。

一般に長期の設計は、男性の方が多くつくっている。反対に女性は、立てていないものが若干多いが、立てていても短期のものが多く(第1報図3参照)。なお表には出さないが、女性は長寿を「よい事だと思う」と考える人は30.6%と少ない。「どちらともいえない」が63.1%であった。男性は「良いことと思う」は54.6%、「どちらともいえない」が40.8%である。

しかし介護に対する責任意識は、男女に差はほとんどないが、「女性が主として」と「対等にすべきである」とするものが圧倒的に多い。

現実には、女性が「より多く介護にたずさわっている」という実態から出された結論である。

更に生活設計の大切にされている内容は、第

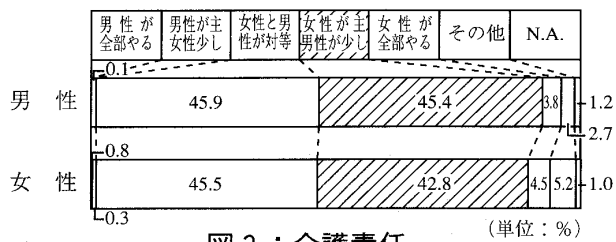


図3：介護責任

1報で詳細に述べてあるが、全体的にみて男女差はきわめて小さい。重要とすることでは健康、経済、家族、人間関係、生きがいの順序に大切と考えられている。またほんの少しであるが、経済問題は女性に、そして生きがいと老後生活は男性に重視者が多い。

さらに長寿の問題をどう考えられているか、年代別に分析してみる。

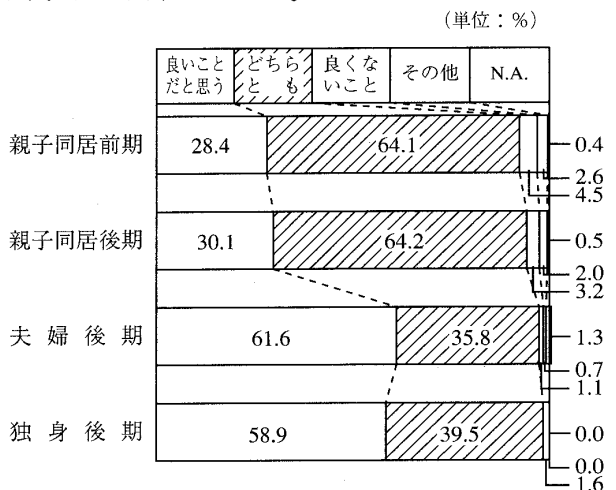


図4：ステージ別女性の長寿に対する意識

若いうちは「どちらとも言えない」が多いが、夫婦後期・独身後期になると「よいこと」と考える人が急激に増える。また表には出さないが、良いと考える人は「より多くの経験が出来る」とか「楽しいこと、うれしいことがあると思うから」との理由からのようである。

では次にライフスタイル別に生活設計作成の状態をみてみたい。

親子同居の後期に、長期の生活設計も多くもつことになるが、独身後期は余命が短かいと考えるためか、設計をもたない人が多い。また表には出さないが、経済準備については夫婦後期から急にできていると考える人が増える。また

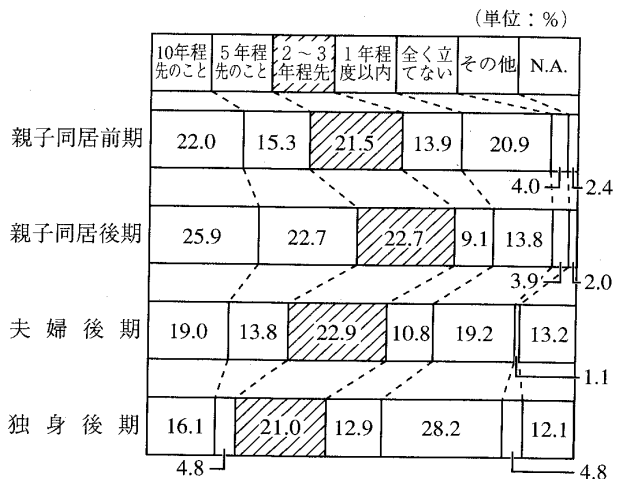


図5：ステージ別生活設計の期間

若いうちは高齢者と同じ家に住むことよりは、近所に住む方を望むものが多いが、夫婦後期以後からは同じ家に住むことに期待するものが増えていく。このように生活準備レベルと内容は、年代によってかなりかわってくるが、年をとるに従い関心も強いし、準備もすすむようである。

4. ライフスタイル別の生活設計

近年、家庭生活も豊かになったが、同時に家族の価値観に合わせて特徴的な生活をやるゆとりもできている。本節では、分析に用いた家庭生活面からみた各スタイル別に、短期・長期の生活設計を行なう上で、具体的課題とその水準の実現のため注意すべき視点などを問題とした。

(1) 食生活重視スタイル

今回の調査をもとに食生活重視スタイルは「食べることを楽しむ」「栄養のバランスを考える」「食材料にこだわる」「料理づくりを楽しむ」と考えた。これを支持する人は全体の4位で11.9%とかなり高いし、とくに女性に重視者が多かった。次にこのスタイルの人は生活設計的にみてどのような準備が必要かを検討したい。

まず短期的には食生活を楽しむという思考や健康などへの対策が日々大切にされるが、一般に日本人の食生活はビタミンとカルシウム不足など、まだ現在の生活に問題がないわけではないが、全体的には近年かなり向上した。したが

って生活設計としては、長期的にみた食生活重視スタイルに対する準備のありかたを中心に検討する必要がある。まず経済面では、食生活費にどの程度金額を使うと豊かになると考えるか。

平成4年の家計調査報告（全世帯）によると平均（1ヶ月82,381円）を標準として比較してみると、十分位中の第十階級ではエンゲル係数は20.3%とかえって低いが、食料費で見ると31.3%増であった。大きくのびる物は外食の62.6%増、果物39.4%増である。この他調理器具もかなり多いことが分析された。更に主食のみで見ると標準価格米10kg当たり3,870円に比べ自主流通米の特上米は55%~78%高である。総合して食生活重視者は高額のものを食べ外食などを増やすものとして、現在の時点のみでなく将来生活も金額面で30~40%増を豊かな水準と考えたい。これは年間約40万円の支出増となる。

健康面は、栄養バランスに加え規則正しい食生活や適当な運動を考えるなどしたい。更に、「生きがい」・「人づくり」については、外食を多くするなど他、家族揃って食事をする、調理をして楽しむようにするなど問題がある。

これらは親子同居前期という若い層に支持者が多いが、老後の健康も大切であり、生活準備として大切な課題である。

（2）衣生活重視スタイル

衣生活重視とは、「ブランド品を身につける」「おしゃれを楽しむ」「裁縫手芸を楽しむ」「流行をとり入れることを楽しむ」などを考えることである。これを重視する人は今回の調査で全体の2.1%であり、10スタイルの中最低であった。しかし近年ブランド品を身に付け、身なりを整えおしゃれを楽しむ生活に対して若者を中心に増える傾向にある。

ステージ別にみると、親子同居前期が支持者の63%余になっており、おしゃれを楽しむ外勤者・夫婦に多かった。

この問題を家計調査結果にみると、平成4年の全所帯の衣料費支出は平均23,344円であるが、十分位階級の第十段階では47,923円と2倍以上になり、奢侈的傾向が強いことがわかる。この

ことは家庭経済の中の調整役を果たしている。とくに和服は選択性の強いものとなっている。

この結果から老後の生活で衣生活重視する人と考えると、年間約40万円位多く支出すればよいということになる。もっとも着ることを楽しむとなると、一枚100万円以上の和・洋服もあるので当然大きな金額となり、より大きな準備も必要となろう。

また着る場合にも着付けとかデザイン・色彩を含め上手な選択技術も要求されよう。美しく装うための色・型・デザインや組合せなどの着こなしのセンスは若い時から養っていかねばならない。更に、アクセサリや小物の使用について、衣生活全体のバランスも考えるべきだ。

もう一点は、人生を楽しく生きるために着る楽しみに加えて、製作する楽しみも大切であろう。当然これには技術的準備も必要となろう。

また老後には、活動しやすいデザインとか着脱にも考慮し、健康面から被服材料の選択が被服管理と共に大切である。

これからは若者のおしゃれとして衣生活をみるだけでなく、より幅広く快適性や、高齢者の生きがいづくりとしての、自己表現と活動しやすいものを考えることが必要となろう。

（3）住生活重視スタイル

このスタイル選択者は10スタイル中、9番目と少ない。前回調査で持ち家率が8割以上であったので、選択肢は家庭内中心の設問とした。「整理・整頓や空間の演出を楽しむ生活」「家の中で個人のプライバシーを守る場所を大切に生活」「部屋の模様替え・インテリアを楽しむ生活」のうち3項目以上選択した者である。

このスタイル重視者はライフステージで見ると親子同居前・後期（2.1%、2.7%……17スタイル100%中）が多く、夫婦後期以降は一人もいない。但し夫婦後期・独身後期は「レジャーと住生活」の2スタイル重視者が3.4、4.0%もあった。これから、若い年代層は家も持ちたいし、調度品やインテリアもしたいが出来ないでいる者の願望数字もあるのではないか。高齢になってくると家の中で楽しく過ごせるよう経済的・時間的余裕が出来ていると思われる。

住生活重視の生活設計は、他のスタイルより経済的な裏づけが大きく必要になってくる。しかし、消費財の保有率や住生活を豊かにする項目は、収入階級が高くなる程保有率が高く、また支出（表4）も多くなっている。

それ故、「家族の満足」「趣味との結びつき＝生きがい」「老後生活への対応」等々、総合的・長期的な計画が大切である。勤労者世帯であればボーナスを含めた長期的設計を立てたい。ローンも良いが返済計画を確り立てた上で、先取り購入をするべきである。

表4 年間収入十分位階級別・平均1ヶ月の支出（全世帯） 単位：円

項目	収入階級 平均	年間収入・十分位階級別			
		I	V	VI	X
教養娯楽耐久財	2,850	1,049	3,270	3,358	3,396
冷暖房用器具	1,330	672	1,043	1,257	2,136
室内装備費	1,395	584	1,028	1,427	3,115

注：総務庁統計局
「家計調査年報・平成4年版」より作成

（4）レジャー重視スタイル

レジャー重視スタイルの選択項目は「スポーツへの参加か観戦を楽しむ」「国内・海外旅行を楽しむ」「テレビ・ビデオ・オーディオ等の観覧を楽しむ」「盆栽・家庭菜園や囲碁・将棋を楽しむ」の4つとした。

このスタイル支持者は比較的高いが、今回の調査で10スタイル中、第6位で支持者は8.4%と余り高くはなかった。レジャーの内容を家計費の項目内容として考えると、幅広くとると食生活もその中に入れることにもなろうし、住居のインテリア関係も含まれるとみれよう。しかしここでは、教養・娯楽を中心に小遣いを加えて考えてみたい。これを総務庁家計調査の全世帯の平均値と、十分位中の第十階級と比較計算すると、教養娯楽は67.8%になり、小遣いも同様70.6%増である。これは全消費支出の増加を上回っているし、全額では両者合わせて月42,381円の差になる。これに交通費や交際費なども加えると差は9万円程度となる。この問題をもう一つ具体的な問題で計算してみたい。レ

ジャー重視を旅行を楽しむ人と考え、海外旅行を一回35万円（土産代等を含む日本人の平均支出額）として、夫婦2人では70万円になるし、2泊3日の国内旅行を7万円とすれば夫婦で14万円これを年2回とすると28万円である。両者合わせて年間約100万円が必要である。これらの費用を男性の60歳から老後約20年間分もつと考えると約2,000万円が必要であろう。

またレジャーにより生きがいをもつためには、広く趣味を若い時からもつことが大切だし、食べ歩くよろこびとして嗜好品も多くもつことなどが必要である。また家族で一緒に何かしていくことも好ましいであろう。更に健康管理のため、レジャーを有効に活用する施設も必要であろう。若い時から広く運動関係をおこなうことも大切だし、高齢者のジョギングを続けることも、取り組み姿勢や意欲にかかわる問題である。これらを家族一緒に行ない、楽しみながら家族の理解を深めていくことも重要な視点になろう。

今後は人間的な向上に役立つレジャーには、受ける娯楽より自分がすすんでする娯楽へとかわっていくであろう。とにかく人生を楽しく有効にすごすためには、適度のレジャー消費は重要であり、若い時から自分にあった方法をもつ努力が大切となる。

（5）教育文化重視スタイル

教育文化重視スタイルとしてまとめた生活内容は、「お稽古事や文化サークル参加を楽しむ」「各種の資格を取ることに努力する」「子供の教育にお金をかける」「読書や観劇・鑑賞を楽しむ」の4つである。これら4項目の中で子供の教育費は子供をもつ世帯に限定される項目ではあるが、他の3項目に比べて最も金額が大きいため、ここでは教育費に注目して検討する。

教育費は子供の学齢により、また通う学校が公立か私立かにより大きく異なる。文部省「保護者が支出した教育費調査」（1990年度）によると、公立小学校210千円、公立中学校263千円、公立高校331千円、私立高校652千円、公立幼稚園205千円、私立幼稚園374千円である。

大学ではさらに費用が多額になり、この場合は、公立と私立の違いだけでなく、東京圏自宅

通学者か地方出身者かによって大きな差が生ずる。東京地区私大職組連合の調査（1992年5～6月調査）によると下宿生の場合受験から入学までにかかった費用が2,106,111円、仕送りの平均は1ヶ月が121,600円であった。月々の仕送り額をあわせた初年度費用は約360万円になり、親の年収約1,026万円の35%を占める。

また、年間収入による差異も大きい。総務庁「家計調査年報（平成4年）」の集計により「教育」について年間収入十分位別に整理すると、平均1ヶ月では15,394円、Ⅰ分位3,781円、Ⅴ分位12,377円、Ⅷ分位22,568円、Ⅹ分位26,655円で、Ⅹに対するⅠの割合は7倍にもなり、平均より1.1万円も多い。

また、世帯主の年齢別でみると、年間平均181,391円に対して、30～34歳…96,001円、35～39歳…181,391円、40～44歳…320,002円、45～49歳…426,633円、50～54歳…287,314円、55～59歳…116,050円と家族周期で大きな違いも明らかである。

このように教育費は、学齢、公立と私立、地域、収入等によって大きな格差を示す。

したがって、教育文化重視スタイルという場合、その重視分はそれぞれの学齢や地域における平均値を基準にしたうえで、上乘せ額を考慮したらどうだろうか。

（6）老後生活重視スタイル

このスタイルは、「老後のためを考え収入を増やすか」「支出を減らし、貯蓄を多くもつようにするか」「老後の生活を考え身近に介護者をつくるか」「老後の生きがいづくりを大切に作る」などのタイプである。今回の調査では、19.2%が支持し、男性に比べて女性の方が若干関心が弱かった。しかし女性の方が長寿であり、夫が死亡して平均8年近く長いきであるので、その準備は一層大切なはずである。

老後の生活のための経済準備の目的としては、とにかく貯蓄を多くもつことであろう。どの程度の経費が必要か検討してみよう。生命保険文化センターの試算によると、平成4年で勤労者が60歳で定年になり57歳の妻と平均年齢まで生きるとする。毎月28万円の生活費として8,366

万円かけることになる。年金は平均収入の人で6,343万円入るので2,023万円不足とするとしている。65歳以後仕事をやめた自営業者は、同じようにみて4,394万円不足となっている。

これらは平均的収入を得て平凡に生きる人達の問題であるが、より老後を安定させるため有料老人ホームのことも考えておくべきであろう。これは夫婦二人で最高4億2千万も出す例もあるし、岐阜県のサンビレッジ新生苑（池田町）で、個室月38万円・2～3人の同居は一人月36万円という費用になっている（ショートステイ1日15,000円）。寝たきり老人になり、介護料に1日1万円必要などを考えると、きわめて大きな準備金が必要となる。

これらに加え、心の豊かさを持つためには、家族関係を大切にすべきであり、介護を受ける人などをある程度決めておく必要がある。しかしより大切なことは、老後を楽しむための積極的対応である。友人づくりや健康管理が大切であるし、楽しく生きうる趣味を広くもつべきである。経済がゆるせば外出も多くしたいし、散歩なども進んですべきである。またおしゃれをしたりして、若者に進んで交わる努力も大切である。

さらに、これらを順調に進めるには、地域住民の理解を深めるため、行政機関での啓発事業や援助も必要である。これらは近年強く出てきている生涯学習の課題でもある。

（7）家の格式重視スタイル

家の格式重視スタイルとしてまとめた生活内容は、「冠婚葬祭を大切に作る」「個人や家の体面を大切に作る」「親戚や近所付き合いを大切に作る」「地域の伝統・慣習を大切に作る」の4項目である。

このスタイルは「まんべんスタイル」「老後生活重視スタイル」に次いで重視する人が多く、とくに60歳以上に高い支持率であった。今回の調査対象に高齢者が多数いたことが3番目に位置した一因であろう。

この生活内容のうち最も費用が大きいのは冠婚葬祭費である。そこで、これを中心にみよう。総務庁「家計調査年報（平成4年）」の集計に

より、収入階層五分位および年齢階層別「冠婚葬祭費」をみると、表5・6の如くである。

平均と比較すると、収入階層別では第五分位が倍以上の年間支出であり、年齢階層別でも49歳以下の世帯と50歳以上の世帯ではやはり倍以

表：5 年間収入五分位階級（世帯別） 単位：円

平均	I	II	III	IV	V
45,424	28,783	29,002	29,800	42,624	96,909

表：6 世帯主の年齢階級別 単位：円

年齢階層	年間支出金額	年齢階層	年間支出金額
平均	45,424	45～49歳	33,830
25～29歳	7,829	50～54歳	78,176
30～34歳	12,716	55～59歳	69,520
35～39歳	18,833	60～64歳	87,870
40～44歳	26,038	65歳～	40,262

上の支出である。これらは家の格式重視とはいえないかも知れないが、年収の格差・高齢とともに必要な支出品目である。

また、結婚費用を地域別で比較すると（平成3年三和銀行調査）、関東地区784.4万円、関西地区825.7万円、東海地区859.3万円と地域によって差が出ている。

このように、冠婚葬祭費は収入・年齢・地域により支出の差があり、また金額も大きい。

家の格式を重視する場合は、地域の慣習を知った上で、高額が必要であり、高齢になってもある程度の支出が必要な事項であるから、長期経済対策の検討が大切である。

また、このスタイルは家族全員の協力が必要であり、家族のコミュニケーションや個々人の意思を尊重するので、家族関係が良好である。地域・親戚との付き合いも積極的であるので、仲間のネットワークも多く、伝統・慣習を大切にするため各種行事に積極的に参加・協力し、高齢になってからは生きがいにもなってくる。

調査結果より、家の格式重視は女性よりも男性の方が重視する割合が高く、定年退職後の男

性にとっては、生きがいの立場からとして大切なスタイルではないか。

（8）社会奉仕重視スタイル

社会奉仕重視スタイルとしてまとめた生活内容は、「ボランティア活動への参加を大切にす」「町の清掃活動に率先して参加し、協力する」「近所の寄り合いに積極的に参加し、協力する」「町内の役職・仕事を進んで引き受ける」の4つである。

これらはいずれも、意欲と時間を必要とするものである。そこで、社会奉仕の時間についてNHK世論調査部による「国民生活時間調査」（1990年）の「社会参加」は「地域社会行事等への参加、冠婚葬祭に関わる行動」であり、われわれの社会奉仕よりもやや広い内容を含む。

まず、「社会参加」という行為を行った人の割合である行為者の比率をみると国民全体の日曜日の数値が11.7%である。これは「電話」をした人11.5%や「レコード・CD」を聴いた人11.1%と同じくらいの値である。次に、時間をその行動を行わなかった人も含めた平均時間でみると、日曜日で23分である。これは「家族との対話」23分と均しく、「洗たく」25分や「休息」の24分に近い。さらに「社会参加」した人だけについて平均時間をみると、日曜日で3時間21分である。この数値は子供たちの「学校外での学習」時間3時間12分や「テレビ」視聴時間3時間58分に近い。

年代別に日曜日の「社会参加」行為者の比率と、行為者平均時間をみるとかなり格差がみられる。男20代では6.5%で4時間07分、女20代では7.8%で2時間48分、男30代では11.7%で3時間47分、女30代では17.4%で3時間05分、男40代では14.1%で3時間32分、女40代では16.1%で3時間22分、男50代では12.8%で3時間30分、女50代では14.6%で3時間10分、男60代では17.6%で3時間24分、女60代では12.4%で3時間03分等となっている。

このように「社会生活」時間から推測される社会奉仕に関わる人は数%から10数%であり、それほど多くはないので、なにか社会奉仕に関わっている人は、社会奉仕重視スタイルといっ

てよいだろう。

(9) 夫婦生活重視スタイル

このスタイル選択者は全体10スタイル中の4位にあり、「夫婦二人の生活を最も大切にす生活」「個人や夫婦だけの時間を大切にす生活」「夫婦二人でレジャーを楽しむ生活」「生活の豊かさを保ち生活を楽しむため子供を持たない生活」^{注1}の4選択肢のうち3項目以上を選択した者である。

このスタイル重視者はライフステージ別でみると、親子同居後期(10.3%・17スタイル100%中)→親子同居前期(8.1%)→夫婦後期(6.1%)の順で、30・40歳代に重視する者が多い。男・女、都市・農村でも差異はあまりない。

瀬沼頼子他が日本家政学会誌に『夫婦の生活時間と生活様式—生活時間調査から—』^{注2}のテーマで発表した中に、無職妻が夕食準備後「娯楽・教育・文化・体育施設」へ出向き、勤務後の夫の出会い、夫婦が共通の趣味・娯楽の時間を楽しみ、揃って帰宅している。平日の夜に夫婦揃って趣味・娯楽の時間を過ごしているという、新たな兆しとも言えるような実態が見えはじめてきていると、報告している。

これは正しく、夫婦生活重視スタイルの新しい生き方である。休日のみならず平日をも活用することは、夫の中年期の生活で、仕事以外に何も無い生活を充実させる方法でもある。

その内容がスポーツであれば「健康」に良く、習い事であれば共通の「趣味」として、老後生活を見据えた夫婦共通の「生きがい」が出来る。経済的に余裕が出来れば、揃って海外・国内旅行に、さらに時間的に余裕があればボランティア活動に参加とその対象は拡大していこう。

このような生活を進めるに当たっては、当然「経済」「時間」「家族員の理解」が必要になってくる。

経済的には子供の教育・住宅取得等々苦しい時期ではあるが、長期の生活を考える場合は多少無理をしても新しいスタイルを実施し、老後の夫婦共通の生きがいづくりにもなるであろう。家族の理解も得られる行動ではないか。

(10) まんべんスタイル

まんべんスタイルとは、とくに一つの生活分野のみに片寄った支出をするのではなく、すべての家庭生活課題を平均的・平等に大切にすると考える生き方である。今回の調査では、22.9%と第1位の支持者をもつスタイルであった。これらを選んだ人は、所得水準が高くない階層で全般的に余裕がないので平均的にせざるをえない層か、所得水準の高い階層では余裕があったので、生活全体をまんべんなく向上させる結果となり、特色が少なくなる方式となったものである。しかしその水準は、ライフステージ(年代)別で若干違うし、収入階級や世帯主の職業などによっても当然差異が出来る考えられる。

これら考える場合標準的なモデル家庭を想定してみたい。

- ①平均的サラリーマン家庭と考えてみた。
- ②生涯平均的な所得水準を維持していく。
- ③家庭にいる妻は一時期パートをしている。
- ④各家庭は、2人の子どもを生み、大学まで進学させる。(うち女子は短大)
- ⑤生涯に住居を一軒建てる(できれば上の子どもが中学にはいる前までに)
- ⑥生活計画は長期的視点を大切にすため、老後の生活準備を考える。

次にこのスタイルの経済準備を検討したい、平成4年家計調査の十分位の第八分位階級をとると、消費支出は平均値に比べ20.7%増、第九分位階級で34.1%増である。しかし所得が向上すると、費目別では教育費、被服費、教養娯楽費、交通通信費などが比較的伸び率が高い。したがってまんべんといっても、まったく平均的に消費支出の増大にはならないであろう。

この他、スタイルでも一応の健康管理などの配慮もされるであろうが、平均的に生活を大切にすると考えられると、逆に特徴がないため、生きがいを持ちにくい心配も出よう。家庭で独自の楽しみをつくる努力が必要となる。

以上、家庭生活からみた各スタイル別の準備すべき課題を検討したが、長期的にみると家族構成・ライフステージにあった「経済的準備」がまず大切である。また、同時に「健康づくり」「生きがい」と含める「心の豊かさ」を持つ姿

勢が重要であろう。しかしライフスタイル別では、これらを若干修正していくものも出よう。ステージ別に応じた必要な課題を、各々平均値を参考にして大切にを進めていくことになる。

5. 女性の生活設計の活用対策

以上の分析結果から、女性は男性に比べ家庭生活面からみたライフスタイルにも若干特徴があるし、長寿問題、仕事の分担などのため、老後の生活準備の必要性がより強いことがわかった。したがって女性が生涯の安定した生活を考えていく場合、長期的・具体的対策を整理してしめくくりとしたい。

第1に、女性は長期的観点にたった生活設計を持つように指導すべきである。元来女性は、男性に依存して生活する意識が強いし、とくに長期的経済面での責任はあまり感じない人が多い。しかし反面、老年人口係数が上がる女性も家庭経済面で責任を強く持つようになっただけでなく、結婚後も勤務する女性が増加している。したがって今日女性自身も生涯の経済計画に責任を持つべきだし、自覚の弱い人には、学習・教育を進めていく必要がある。とくに家庭の主婦に対しては、社会教育による指導が必要である。一般に、口コミや映像からの情報が中心となり易い女性に対し、活字によるわかりやすい情報提供の工夫も必要である。

第2に、家庭生活面からみたライフスタイルにあわせた、具体的な生活設計内容を十分吟味する必要がある。従来生活設計問題は平均値主義で一本として考えられていたが、今後は生活水準の向上にともなう、各家庭のもつ価値観の多様化にあわせた生活準備が必要となろう。つまり地域などの平均値にあわすのではなく、家族でよく話し合い何か重要かを整理して、それにあう各々の生活設計づくりが必要である。これにはライフスタイル別・所得水準別にモデル設計をつくる必要があるし、それぞれにライフステージを考えることが望まれる。この作業が大変すぎてできないとすれば、家庭生活条件を変数的に考えていくことが望まれる。なおこの条

件としては、家族数や住居の所有など家庭生活の条件などが対象になるし、係数的なものは多くの既存調査結果から推計していく必要がある。

第3に、生活改善の方法としては、家庭経済診断・生活設計が要求されるが、現在診断指標も比較検討に用いる基準も試算していくべきである。これは既存資料で適当なものが出しにくいのが、思い切った特定基準を出し、試行錯誤しながら納得できる基準を作成するよう努力すべきである。また家族の価値観と構成にあわせた長期生活設計を大切にすべきであるし、生活内容の総合調整が要求されよう。とくに女性にはこれら調整能力が要求されるが、筆者たちは分析してきた視点である家族の「健康面」「生きがい面」「経済面」が重視されるべきであるし、更に介護準備を含めた「人間関係面」を大切にしなければならないと考えた。

第4に、生活設計は、まず家族のもつ価値観・ライフスタイルに対する重要課題を確認し、それをできるだけ平易に表現できるように考えていくべきである。すでに長期生活設計表の形式はいくつかのものがでてきているが、ライフスタイルを意識してこの記入をおこない、生活設計づくりと活用の過程で時々これをチェックさせることが必要である。一般に家庭では、生活時間の使い方や、経済管理計画などで中心に考えていくべきであろう。しかし同時に、生きがいや健康管理のチェックもできるものにすべきであるし、長期で見れば老後の同居者や介護者をどうつくるかを考える項目もつけるべきであろう。これらは生活設計表の活用方法の問題であり、主たる家庭管理者としての女性の利用責任が大きい。

第5に、生活設計をすすめるための指導教育が大切となる。元来これは学校教育で意識されるが、小学校では主に小遣い帳の問題、中学校では家計問題や購買行動を含む消費者問題を、そして高校ではより高度な家庭経済、生活設計や消費者問題として指導されている。しかし今後はこれらを小中高校を通して、生活設計教育として系統的整理が要求されよう。更に生活設計教育は、日常の家庭生活の中でも実施される

必要があろう。しかしこれら指導するためには、保護者の教育として社会教育の協力も重要である。これらは現在、消費生活センターや市町村行政機関で実施している処も多いので、その活用のため女性自身の自覚・意欲が重要であるし、参加できるよう家族の協力が望まれよう。

以上、今回は具体的に思い切った生活設計内容の提案をしたが、論理的な面がやや問題の処もあろうが、生活設計の中では参考にされるべきヒントも多く出すことができたと思うし、今後読者の批判を通してより精緻なものにしていきたいと願っている。

注1 今回調査は老人会以外は子供を持っている人を調査対象としたため、このような数字になったかもしれない…(小中高校及び大学生の父母を対象とした。)

注2 日本家政学会「日本家政学会誌」第44巻第9号P21～28参照
瀬沼頼子他6名 「東京都世田谷区在住の夫婦の生活時間と生活様式—1990年生活時間調査から—(第4報)」

参考文献

1. 須田・堀田他『ライフスタイル別の生活準備』
第1報「ライフスタイルと生活意識」
第2報「ライフスタイルと経済意識」
東海女子短大紀要 第18号 1992年3月
2. 須田博司他「高齢者のライフスタイルと生活準備」
東海女子短大紀要 第19号 1993年3月
3. 日本家政学会家庭経済部会編「生活の経済学と福祉」
建帛社 1992年5月
4. 生命保険センター「老後の生活設計に関する調査」
1990年5月
5. 三東純子編「21世紀のライフスタイル」朝倉書店
1991年
6. 日本家政学会編「生活設計論」朝倉書店 1988年
7. 生命保険文化センター「ライフプランガイドブック」
1992年

—家政学科—